

御宿の前裁池水のさまなど、寫し繪見侍りて。
いとゞ猶君が軒端を忍ぶ艸うつせる筆のほかも知られて
渚月亭といへる所を

玉よせる渚の月にいほりしめてこゝろとすめる秋の池水
一、千宗室よりもみち葉を送られて

廿六日。大森好治後改新置 俗稱三郎兵衛老練夕齋。去十日の書狀來る。近頃千宗室などと高雄へまかり、紅葉の散りたるを拾ひしまゝ、約束に任せ送候由にて、包紙に『散りし葉の其色さへもかはりけり拾ひいれぬる袖のせばさと』書付しまゝ、先づ書付侍る。

紅葉はもあだにや苔に朽なまし君が心のいろなかりせば
吹風のたよりにつけし紅葉はの色さへ深き山路しられて
一、竹田忠張に贈る

去し月の夜、對雨思ひをのべしを、忠張の許人の傳へしに、かく書て小野愛清に附てたうべける。

九月十三夜、兼ての御作第二の芳韻烟の字を。

よし暫しかゝらばかゝれ長月の名やはかくさん雲も烟も
唐歌・大和歌様々の御作意、まゝ返し侍りて。

詠め侘び夜半のくもりを讀歌に中々月の名こそたかけれ
あまり無下なること共、正眞連歌を二句つゞけたる様なる
儀に候へども、第一御作を承度、又は強ていなび候へば却
て物に似申候間、筆にまかせ初一念書付申候。電覽以後丙
丁童子にあたへ可被下候。

不珍ながら白きを後の辭御取合、又菊の上の露と御あま
し、借も御珍作御手に入申候御事かなと感吟仕候。
去葉月拜見をゆるされ候御詠の内。

宵の程とばかり月のほのめきて侍りければ。
ひたぶるに浮名はたゞじ雲間より玉ゆりもれし月の光に
中にも心ひかれ、あまた度詠吟仕候て。

雲居より玉ゆり見えし宵の間の月に立名はさもあらばあれ
かやうに申て見申候へば、今更戀に成申候間引やり申候。
ふと存出で、序に入御覽申候。一笑々々。

此返し
むさし野の草の枕に、そことなき思ひの露、あだなる世を
かこち、くれ竹の窓の前に、うきふしをかぞふる秋の心を
もなぐさむべきは、山の端ならでさし入る月にこそ有べか

りしを、其一夜またの宵も、むなしき名のみたつ雲のはて
しなさ、いくへばかりのうらみなりけめ。げにやめにふれ、
耳にきくにつけて、心に思ふあまりを、ひなびたることの
葉につゞり、しるべなき闇にたどりて、いさゝか其うら
みをなぐさめ侍りければ、もとよりまめなる所には、花薄
ほに出すべきふしにもあらざりけるを、霜に朽ちたる木の
葉をもさそふ嵐の、よその垣根につたふるたぐひにや有
けん、忠張のもうとの其つたなきを捨給はず、見はやし給
ふのみにあらで、世のあはれ深くつくせることの葉さ
へ、かいつけてたうべけるを、あかずめで覺え侍りけるあ
まりに、難波津のみじかき筆にまかせ、よしあししらぬを
こなること書きつけ侍ること、例のはづかしめしらぬみだ
り心地なるべしや。

晴れにけり君がこと葉の花みればくもりし月の秋の恨も
いづれいかに二なき御心よせながら、殊更に中々月の名こ
そ高けれと聞え給ふこそ、めいぼく身にこえて覺え侍りけ
るまゝ。

思ひ捨し露も映なき言の葉に哀れをかけし人もある世を

折からこゝちそこなひて、打ふせりて、いとゞなほ長き夜
をかこち、遠ざかりつるきりくすの聲さへ、いつしかに
絶えはてゝ、物かはと思ふ山里ばかりなりしに、紅葉より
紅なる御ことの葉の色ふかさに、病さへおこたる心地して
すぐ返し、猶もよほされかゝることさへ、かいつゞり侍
りける。

見ずはいかに侘つゝ侘む長き夜を忘るゝ草の言の葉の花
一、山本基庸の許へ
廿八日。基庸のがり短冊の書様尋侍るとて書て添侍りけ
る。

あはれしれ哀れとぞ思ふ言の葉にまよふ心の水ぐきの跡
一、好治に贈る紅葉の歌と詞

十一月朔。好治が許へ紅葉の事、謝申しつかはすとて書付
也。

忍ばれむ物とはなしにとやきこえし、小倉山のあたりなど、
いにしへを思ひ、むかしを戀ふる月花の折々となく、夢に
もがなとしたはしさのあまり、過しいつの頃にや有りけん、
好治のがりせうこそせしついでに、其ほとりのせちに忍ば